

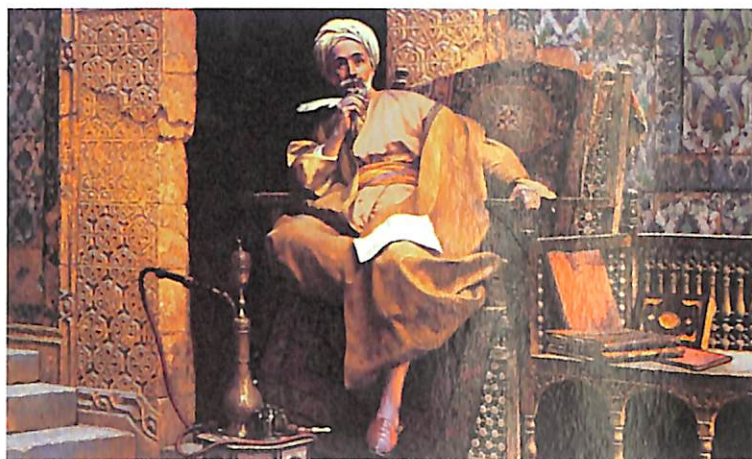


MINERVA
西洋史ライブラリー
⑤1

大英帝国のオリエンタリズム

— 歴史・理論・諸芸術 —

ジョン・M・マッケンジー 著 / 平田 雅博 訳



ミネルヴァ書房

14

パルマケイア
叢書



Crucifying the Orient



民族迫害の思想と歴史

ロシアのオリエンタリズム

カル・ハナ・サーヘニー [著] 袴田茂樹 [監修] 松井秀和 [訳]

柏書房

ロシアおよび中央アジア図



【序】 ロシアによる東洋蔑視

一九九一年一二月、世界で新たに一五カ国が誕生した。二〇世紀の束の間の独立を別にすれば、二〇〇年以上を経て再び独立した国もあれば、一世紀ぶりの独立という国もあった。かつてのソ連からの離脱を決めたのは、国民投票だった。

現在、これらの新興国家は協力やつまりぎを繰り返しながらも、失われたアイデンティティや国家としての威信を再び取り戻そうとしている。地球上のあらゆる民族集団ナショナルティーズと同様の国際的地位を求めているのである。こうした国々が求めているのは、ロシア人も含めた旧ソ連のあらゆる民族と共通の目標であり、それはクルド人やアイルランド人、スペインのバスク人、カナダのモホーク人、グアテマラのケクチ人たちが求めているものと同じものだ。

新たに独立した一五カ国が模索しているのは、たんに教会やモスクを再建するとか、中央アジアのフェルガナ地方に伝統的なお下げの少女が再び現れるようにするといった目に見えて具体的な文化を手にかけることではないし、また近隣諸国との文化、政治、経済のつながりを再構築することでもない。当初のそのような段階は終わり、今や魂を模索するプロセスが始まったのである。こうした諸民族の願望は、おそらくリトアニア人作家エスチマス・マルツィンキャヴィチユスの言葉で最もよく理解できるだろう。

われらが祖先から受け継いだ大地は——われらの大地である。われらはこの大地をリトアニアと呼んでいる

し、この呼び名が地図の上から、また他の民族の言葉から消え去ることを望まない。われらは、他の立派な民族や国の名を呼ぶときと同じように、リトアニアの名を書き、また口にする。そして、他の民族にも同じように、われらの名を尊敬の念をもって呼んでもらいたいのである。

われらの過去の歴史は、われら自身の歴史である。一条の光と真理よ、その悲劇的であつた英雄的、そして血だらけで陰鬱なる歴史のページを、また古くて新しい文化の面影を明るく照らしたまえ。われらが話し、誇りに思う言葉は——われら自身の言葉である。その言葉はだれをも傷つけないし、だれをも貶めない。他の言葉と同じく、それはただ生きのびようとしているのだ。

われらを見つめる人間は真理と正義を求めている。その人の生活、仕事、創造性はしっかりと守らねばならない。

われらが暮らす環境——それはわれらの環境であるが、われら自身とその子どもでもある。さあ、そのよんだ緑色の目を洗い清め、愛と思いやりで環境を取り囲むのだ。^{*}

ソビエト・ウォッチャーやメディアは、あまりに呆気ないソ連邦の崩壊に不意打ちを食らった。ソ連国内では諸民族がいかに繁栄しているかを示すため、その経済発展を示す数字が世界に向けて発表されていた。昨日まで、的には後進的だった中央アジアの諸地域が大きく発展したことを示すデータや統計が示された。しかし、領域はどういうわけか、とくに経済的観点からすれば明らかに有利な連邦制度を拒否したのだった。彼らは、多民族国家の抱える諸問題を解決したとして、ソ連の業績を高く評価していた。彼らは民族がなぜ独立する必要があるのか、その背後にある論理を理解できなかった。ヨーロッパが統合へのプロセスがあるとき、それはなおさらである。グローバル化のプロセスと単一市場経済こそが唯一の正しい方策だ、には考えられているからだ。それぞれの民族のアイデンティティや言語を求めることなど、できない過去への憧憬であると思なされたのだった。モスクワ中央は、イスラムに帰依した義者と見なしたし、こうした便利なレッテルは西側諸国にも容易に受け入れられていった。

本書は、ソ連が半世紀以上にもわたって描いてきたものとは異なる現実の姿を浮き彫りにしていく。本書はまた、中央集権国家が各民族と文化、環境を意図的に破壊してきたことも取り上げる。さらに、社会と人間の尊厳や人間の性の剝奪についても言及する。各民族は文化を踏みにじられながらも自由を模索したのだが、その結果は多くの者にとって悪夢となった。こうした試練はツァーリ時代に始まった。諸民族の土地が植民地化されはじめること、^{オリエンタリズム}東洋蔑視（本書でいう東洋とはカフカスや中央アジアを指す。日本や中国をはじめとする東アジアは含まれない）の態度が現れ、征服された諸民族への差別を招いたのである。^{オリエンタリズム}東洋蔑視者の言説は、植民地を支配する体制が、その人種、文化、歴史も含めて優っていることを主張するものだった。併合された地域ではロシア政府の搾取的政策が正当化され、同時にロシアの行政府、それに研究書や文芸作品も、東洋がいかに悪辣かといったステレオタイプすなわち紋切型の通念を広めていたのである。そして実際は侵略者である植民者が、野蛮人や未開人の植民地に向けて派遣されていたのだ。ロシアは言語と文化のルーツの多くを東方や南方の隣人に負っていたにもかかわらず、ヨーロッパの思想や諸概念を取り入れたために、皮肉にもそのルーツを拒否したのだった。

* * *

ピョートル・チャアダーエフ（一七九四—一八五六。ロシアの思想家。主著に『哲学書簡』『狂人の弁明』は一八二九年、ニコライ一世（一七九六—一八五五。デカブリストの乱を鎮圧し、反動政治を強化した）時代のロシアについての次のようにコメントしている。

われわれは特別な民族といえるかもしれない。たしかにわれわれは人類の中では目立たない一民族にすぎないが、しかし何か偉大な教訓を世界に与えるために、そしてそのためにのみ存在しているのである。^{*}

チャアダーエフの発言は、一五〇年以上を経たエリツィン時代のロシアで共感を呼んでいる。そこでは、ブーメ

ランはロシアの発明品だと皮肉たっぷりに言われている。ロシアが何をしようと、すべてロシア本人にはね返ってきてしまうからだ。

こうした二つの表現は、しかしそれもバラドックスに満ちたロシアの歴史的経験を要約したものだ。ロシアの東洋蔑視も独特の現象であるが、このバラドックスの一部である。ロシアはヨーロッパによって植民地化されることなく、自ら外国人に支配される道を選んだ。ピョートル大帝（ピョートル一世。一六八二—一七二五。国家・社会改革を進め、ロシア帝国を建設）時代にヨーロッパ人を招き、国政を委ねたのだ。フランス人やイギリス人、ドイツ人はロシア人を「東洋的野蛮人」と見なし、そうしたレッテルを貼った。にもかかわらず、ロシア人はその同じヨーロッパ人、とくにドイツ人を招いて、ツァーリ政府の研究機関や行政機関の設立および運営に当たらせていたのである。ピョートル大帝以降のロシアにおける新エリートは、こうした諸機関の教師たちからヨーロッパの東洋蔑視者としての姿勢を学んだ。エリートたちは当初、ロシアが東洋であることを受け入れ、後にはこうした不名誉なレッテルを払拭しようとして、東洋蔑視をロシア自身の植民地へと向けていった。エリートたちはそれと同時に、ヨーロッパ人として受け入れられようと努力してヨーロッパの諸概念を取り入れ、自国の文化に背を向けたのである。ロシアが植民地で行ったことは、多くの点でヨーロッパ諸国が植民地で行ったことと同一で、ロシアはそれを模倣したにすぎない。

その後のヨーロッパへの幻滅や内的なジレンマ、そしてさまざまな議論を経て、一九世紀のロシア文学と思想が発展していったのだが、その担い手はロシアのエリートに限られていた。ロシアのヨーロッパ化政策およびヨーロッパの合理主義や実証主義を支持した西欧派と、ロシア正教ならびに専制体制を擁護したスラヴ派との議論は、二つの拮抗する世界観の闘いであり、ヨーロッパにおける合理主義と理想主義との間の議論に匹敵するものである。すべてを総括する理論は合理主義者だけの特権というわけではなく、それはヨーロッパの初期の経験と結びついている。キリスト教の一神論は、唯一神および唯一の真理の概念と結びついたものだ。これと鋭い対照をなしているのは、多くの宗教、数千もの神が存在しているも唯一の聖書といったものなどはない、多くの非ヨーロッパ世界における多神教である。このような社会では、どこに真理があるかを特定することなど、ほとんど不可能である。

なぜなら、各人が自分自身で真理を発見するとされているからだ。多様な真理が存在するということは、真理の独占状態を拒否することであり、真理は哲学者や学者団体だけの特権ではないということでもある。反対に、聖典宗教であるキリスト教は、無謬かつ神聖な神の言葉の権威と至高性を信じる。さらに、キリスト教社会では他の社会のように人間の肉体的喜びと魂の喜びは補完的なものとは考えられず、むしろ相反するものとされた。キリスト教は地上のあらゆるものに対する人間の支配を主張したが、それと同時に、人間を神の下僕へと貶めてしまう。そして最後に、ヨーロッパでキリスト教は国教となり、教会は個人の生活に対しても権力を行使した。また他の社会のように自分自身や共同体が個人の行為の監視に当たるのではなく、ヨーロッパでは教会という外部の機関が監視に当たった。その結果、個人は極端から極端へ、つまり自己主張の試みから従順さや懺悔の深みへと、絶え間なく移ろうことになったのである。

こうした極端さがヨーロッパ社会で多くの議論を生み、どちらの信条の権威や優越を認めるかで争った。教会が神の言葉の至高性を主張し、ガリレオやコペルニクスの発見を否定したのに対して、そのような教会に反発して、理性の卓越性や人間の権利を提唱する側も強硬だった。結局、議論の振り子はこうした両極端、すなわち理想主義と合理主義の間を揺れ続けてきたのである。

近代ヨーロッパの歴史は権威に対するたゆみない闘いの歴史であり、その初期の例としてはルネサンスを挙げることができる。ロマン主義や象徴主義、リアリズム、未来主義、実存主義といったその後ヨーロッパやロシアの芸術界において次々と生まれた文化運動にも、こうした傾向が見られる。どの時代においても、それぞれの文化運動は他の運動に異議を唱え、舞台の中央に躍り出ようとした。そして、他の運動に対する闘いでは常に、他のすべてを無価値なものとして拒んだ。多様な思想の潮流が共存するなどということは、ヨーロッパでは滅多に受け入れられなかったのである。その後、多くの理論は、国家からの支持を獲得するに至って有害なものとなった。なぜなら、国家は自身の利益のために理論を操作したからである。

実証主義はヨーロッパ史の特異性によって生まれたものである。ユークリッド幾何学やニュートン物理学、ヘーゲルの弁証法、ダーウィンの進化論などと融合した合理主義の興隆は、ヨーロッパでの産業革命の加速、そして植

民地帝国の拡大と軌を一にしていた。適者生存の理論と、チャーチスト運動（一八三六—四八年のイギリスで普通選挙権獲得を目指した労働者階級中心の政治運動）に対する抑圧とは、結果として自国民に対する搾取を政治的に正当化した。また、マルクスの『資本論』はヨーロッパの実状を深く分析している最も重要な著作の一つである。これらの理論は当初、新たな支配者であるブルジョアジーの優位を強化するのに寄与した。国内問題をめぐる論理はやがて植民地にまで広げられたのだが、ダーウィンがアメリカの奴隷制度を正当化したように、そうした論理は人種、文化、言語、歴史の面でのヨーロッパ優越論を広げた。そのうえ、理論はもはやそれが神の言葉で語られるからではなく、理性と科学で正当化されているがゆえに、神聖かつ普遍的な最終的真理であるとされるようになったのである。このように東洋蔑視や国内植民地建設の理論的正当化（マルサス）もしくはその否認は、すべてヨーロッパの歴史的文脈の中で行われ、しかもそれはエリートの間だけに限定されていた。ここで重要なのは、イデオロギーの違いはあれ、植民地政策が必要だということ、そしてそれが肯定的影響をもたらすということに関しては見解の相違がなかったことである。

マルクス主義も同様だ。マルクス主義のモデルは一九世紀当時の知識や理論の限界に縛られているし、人間社会の発展についてはダーウィンやヘーゲルの理論に基づいていた。そして社会の発展は物的生産や経済関係の観点から説明された。マルクス主義の創始者たちは資本主義の諸関係に関する洞察力を示したものの、そのモデルは議論を呼んだ。というのは、多くの疑問点は答えられないままか、あるいは人類の歴史とまったく矛盾するものだったからだ。それでもマルクス主義モデルとその史的・弁証法的唯物論はマルクス主義にとって金科玉条となった。マルクス主義者たちは、マルクス主義は科学的に証明されたのだから、人間や党、国家は歴史のプロセスに介入し変革を加速させる権利を持つ、と主張するようになった。

ソ連におけるマルクス主義は、キリスト教社会と共通の多くの欠点を有していた。なぜならソ連のマルクス主義者もキリスト教徒と同じように、他の真理を拒絶したからだ。ここでもまた、唯一の普遍的真理があり、それは人類全体に適用できると提唱された。ソ連政府の行った行為は多くの点で、十字軍や宗教裁判を想起させる。焚書が行われ、人々は信念を曲げようとしなかったとの理由から逮捕、追放、銃殺に遭った。そして文化・経済生活の恣

意的モデルが強制的に、非ロシア地域も含めソ連全土に移植されていった。

こうした強制はある意味では不可避であり、それは今世紀の社会主義国の実験にとどまるものではない。社会主義の中央集権国家であれ現代の国民国家（ナショナル・ステート）であれ、中央による略奪といった傾向はあらゆる国に見られるのである。国民国家は程度の差こそあれ、国家が円滑に機能するため、画一的な教育、メディアの管理、時には計画経済までも模索した。支配のあらゆる手段は中央に集中されねばならなかった。ヤクーチア北部（ロシア極東地域）とカザフスタンの子どもが自分たちの歴史や環境とは関係のない同じ授業を受けようとも、国家にとってはどうでもいいわけである。子どもたちは学校に通うロシア人子弟とともに、政府の目標に奉仕するという点でお互いに結びついているのだ。子どもたちはその一方で、自分たちの住む環境からは疎外されていた。

アメリカやヨーロッパがソビエト・パッシングにのめり込み、左翼の急進派がソ連に背を向けたとしても、それはせいぜいソ連がマルクス主義の諸原則から逸脱しているといった程度の意思表示にしかならなかった。急進派はその後、毛沢東やカストロ、チェ・ゲバラに——トロツキーの永続革命論の継承者として——、またサンティアゴ・カリリョ（一九一五—）。スペイン共産党の指導者でユーロコミニズムを提唱。八五年に全役職から解任）、マルクゼ（一九八八—一九七九。新左翼の哲学者）、アルチュセール（一九一八—一九九〇。フランスの哲学者）、グラムシ（一九一八—一九三七。イタリアのマルクス主義思想家）に救いを求めた。ソ連の経験は東ヨーロッパ、中国、カンボジアなどへ波及していったが、最終目標は全人民の幸福であるということとはとくに無視されていた。平等を目指す共産主義者のユートピアは、ヒエラルヒー（階層制）の上に構築できるはずがない。ヒエラルヒーは人間を矮小化するばかりか、人間の意識と物的生産を機械的に結びつけることで、人間を抽象的存在に貶めてしまう。こうしたヒエラルヒーは自己破壊的なものである。なぜなら、少数の選ばれた者の覇権を認める一方、残る国民を枠にはめ込み、彼らをたんに導きそして発展させていくべき素材と見なすからだ。グラムシも文化を大衆の常識と高等文化に区別することで、同じ轍を踏んだ。ヒエラルヒーは、自国民に対する侵略、多数派民族の支配、そして「周辺」の存在を正当化している。覇権を提唱し、そして単一の発展モデルに沿った進歩を目指す理論は、いずれも全体主義に転化していく。少数の選ばれた者に真理の保有を認める半面、国民の大多数が真理に近づくことすら許さない

からである。

ソ連でも、中央の厳格な支配が緩んで初めて、多くの民族は発言権を得るようになった。彼らによる悲痛な体験談や身も凍るような事実は、それ自体で普遍的理論に対する厳しい審判となっている。グラスノスチ以来、非ロシア人が繰り返し訴えてきたのは、彼らの体験した悲劇、破滅、ホロコーストであり、そこからカフカの作品に見られる悪夢のような光景も明るみに出たのだ。ソ連が実施した一九二六年および七九年の国勢調査で、民族の数は一九四から一〇一へと、ほぼ半数に「減少」した（皮肉にも、一九八九年の調査では一二八まで増加した）。これについては、ソ連時代の初期に諸民族の消滅が避けられなかったためだとされた。しかし、われわれは現在、こうした消滅あるいは同化と呼ばれるものがどのようなものだったかを知りつつある。

本書は主に旧ソ連の二地域、中央アジアとカフカスを取り上げる。両地域とも多元的かつ多言語の文化を誇り、近隣の中国、ベルシャ、インド、近東の各文化と絶えず同化しつつ、近隣地域の物質・精神文化を豊かにしている。彼らの町は地域全体の知識の宝庫だったのだ。本書はまた、植民地化や住民に対するジェノサイドあるいは隔離政策を通じて、中央アジアやカフカスの文化や経済が破壊されていった様子を記録にとどめることも意図している。さらに、経済や言語、政治の分野における国家主権の押しつけ、普遍的な単線的モデルを通じた正当化、後進的な東洋人といった軽蔑的なステレオタイプの普及についても明らかにしていく。

* * *

本書の構成は二部に分かれている。第一部では、ロシアにおける東洋蔑視の始まりとその特異性、ヨーロッパの思想とツァーリ政府の膨張主義との結びつきを取り扱う。さらに、行政担当者や学者、作家らの東洋蔑視者としての姿勢も取り上げる。彼らの偏見すべてがその後のロシアにおける著作やロシアにとっての東洋の解釈を決定づけていたのである。第二部では、非ロシア人を指すようになった「少数民族」に対する二〇世紀のマルクス主義の実践を検討する。本書はロシアの政策に一般的に見られるヨーロッパ至上主義の深層分析ではなく、むしろその支配的な傾向や態度を取り上げるものである。第一部は主に革命前を対象とするが、これに目を向けないと、第二部すなわち二〇世紀は理解できない。さらに、第二部ではソ連という枠を超えた多くの争点も取り上げることになる。

このソ連の物語は多くの理論や実践と分かちがたく結びついていた。政治、経済、文化の分野を問わず、国家が理論によって神聖なものとして開始したプログラムは、すべて東洋蔑視と関連していたのである。こうした側面はほとんど知られていないが、著者は友愛とか温かさといった表現に包み込まれた国家のレトリックに内在する二面性、つまり「バフチン（一八九五—一九七五。ソ連の文芸学者。第9章を参照）の『^{アソシエーション}両面価値性』を取り上げる。逆にいえば、ソ連における東洋蔑視は多くの場合、支配民族であるロシア人に対する弾圧（これも理論で正当化された）と切り離したり、あるいはこの観点からだけ見たりすることはできない。本書ではロシア人以外の民族集団すべてを取り扱っているわけではないが、だからといって、取り上げなかった民族集団の運命が他と異なっていたというわけではない。

本書はオリエンタリズムに関する他の著作、例えばエドワード・サイード（一九三五—）。パレスチナ生まれの東洋学研究者。主著に『オリエンタリズム』『文化と帝国主義』による独創性に富んだ研究とは異なっている。本書を通じて垣間見ることのできるのは現実、そして非ロシア民族がどう対応したかという描写である。その理由は、取り上げる地域について、ロシア人であろうとなかろうと、読者のなじみが薄いからというわけではない。ソ連の中央集権体制は、厳格な監視や検閲を通じて、偏見に満ちた著作を提供してきたが、そうした著作の多くはイギリスの社会運動史家E・J・ホブズボーム（一九一七—）の著作（『ネーションズ・アンド・ナショナルリズム』『20世紀の歴史極端な時代』）も含め、外部世界が参照し続けているからである。最終章では一九七〇年代の民族の再生、ソ連全土に共通とされた単一モデルの崩壊と民族の出現、ソ連崩壊以降における民族の重要性を探索していく。

本書はロシアの東洋蔑視について議論を進めていくが、理論的レベルでは、人間社会に対する強制手段としての役割を果たした単線的な発展モデルや進化的な発展理論の支配と効果を問題視している。本書はまた、物事をあまりに単純化する還元主義や観念の固定化、ヒエラルヒーは必ずしも分析道具だったのではなく、むしろ力関係を定着させるために人間を枠にはめ込み、導き、そして人間性を奪う手段だったと考えるものである。

